

東京代々木昭晃堂發行 定價貳圓七〇錢 三月

著者は横濱高等工業學校講師で岩石鑛物専門の士である。近年鑛産工業の盛大になつた折から鑛物と云はず岩石に及ぶ鑛産物一般に互つた新文献の編纂は機宜なことである。本書には鑛物及岩石の性質、成因、産狀、産地、用途、産額、輸出入、市價等を説述し應用及經濟の参考にもなる様に編述されてある。よく集成されてはゐるがあまりに廣すぎた爲め、記すべくして之に到らなかつた點が少くない。石炭の條下に朝鮮の重要鑛物で内地に移入される無煙炭の記事が全々欠けてゐる如きは其の一例である。石材の産地などは盡く地質調査所の日本地質鑛産誌を寫して來て其の誤植表にさへある誤植を正さなかつたり、地名の悪いの例へば京都市内であるべき白川石産地を愛宕郡白川村にしたりしてある如きである。嘗て地質調査所の百萬分一地質圖説明書を殆んど謄寫して成書の一部になした應用地質學が同人間に少しの誹謗を受けたことを思ひ出して、盲目引きの無謀一つまり努力なしに書物を作ることを誓めたいものである。(S)

○地形圖に關する作業

北田宏藏著 古今書院發行
定價二圓

努力倦むことを知らない著者は地形圖に關する作業としての本書を新しく出版された、本書等高線の考察、地圖の計測地形圖に關する諸作業の三部門を解説し要を摘み術を説くこと誠に親切であつて、挿圖の多くはすべて著者自ら手を下し

たものであるといふことであるが其數凡百四十七、我等は本書を得て始めて地形圖の利用され得る理論を知りうるといつても過言でない、敢て一般の地理學者に本書をおすゝめすると同時に著者に深甚の敬意を表する。(藤田)

○山崩

中村慶三郎著 岩波書店發行 定價二圓三十錢

菊版二五四頁山崩といふ地理的事實を克明に取扱つた良なる著述である、前編山崩概況をのべ後編に山崩地域の記載がある、それは主として新潟縣に限られてゐるが、近畿にもこの種の慘害は最近に峠に起つたことである。我等はこの書から多くの新しい知識を得たことを記して著書に感謝するものである。(藤田)

○經濟地理學提要

豊田與市郎著 甲文堂發行
昭和九年六月 定價二圓

本書は著者が浪華高商で教授された稿本をまとめられたものであつて菊版二五五頁の手頃な参考書である、叙事簡潔要領をつくした點をとるべきであらう。(藤田)

○日本氣候地誌

井上梅吉著 有文書院發行 定價二圓
菊版二七〇頁、主として日本各地の氣候を説明したものである。(藤田)

報 雜

○「紀伊半島東南部の含炭第三系宮井統の地質

時代に就いて」追記及び補正 本誌第二十一卷第

五號(本年五月號)所載上記表題の拙稿の内容に關し次の諸點を注意しておきたい。

(一) 宮井統の植物化石は凡て坂倉藤彦氏の研究にかゝり、筆者は全く手をつけてゐない。従つて拙稿第三章第四節「宮井統の植物化石群」に於ては、坂倉氏研究の概要を抄録した上、これに基いて若干の私考を加へておいたに過ぎぬ。しかるに筆者の行文上の不注意のため、この兩部分の區別がつかなくなり、原研究者たる坂倉氏には誠に申譯のない仕儀となつてしまつた。深く同氏にお詫する。

三五二頁一四行より三五二頁一三行の半ば迄は、いはゞ坂倉氏卒論の抄譯のやうなものであり、文獻(22)乃至(30)もこれよりそのまま轉載したものである(22、23、28以外は筆者も一通り目をとほした)。しかしてこれらの事實より坂倉氏は單に、宮井統の時代は下部中新世乃至上部漸新世中の或時期であらうと推定して居られるのみ。三五二頁一三行半—三五四頁九行が筆者の私見である。

(二) 第6圖及第7圖は多數の坂倉氏原圖中の一部を轉載したに過ぎず、これ等兩種の同定は此處に圖示せる標本のみに基くものではない。

(三) 筆者は豊島氏による介化石の新發見の結果、宮井統が中新層なるべき事には殆ど疑の餘地がなからうと述べた。しかしこれは勿論、本邦の所謂中新層特に田邊・鉛山統—今

日の所では宮井統の時代はこれと相對的な意味に於てのみ稍々正確に把握し得る—の對比及び時代について、現在最も廣く認められてゐる見解(主に横山教授に従つた)を正しいものと前提しての事である。しかしながら、さきに宮井統を古第三紀層と認めたのも同じ前提に基いてゐるのであるから、現在の知識に關する限り、拙稿に於て述べた所には甚だしい誤はあるまいと信ずる。今後如何なる改變を要するに至るかはもとより知る所ではない。わかりきつた事のやうではあるが或る方面より質疑を受けたので、誤解をふせぐ上にも一言しておく。

(四) さる方より、拙稿の文章中に屢々先輩諸氏に對し甚しく禮を缺くものがある旨御注意にあづかつた。先輩諸家の御貢獻の偉大にして、筆者等の負ふ所の甚大なるはもとより筆者の充分に認めて深く感謝してゐる所である。しかるに尙且、かゝる過誤を敢てした事は、慚愧、自責に堪へない。(鈴木好一)

○和蘭領印度

一九三三年ロツテルダム商業會議所報は世界不況は既に底をついたと述べたけれども、一九三四年になつては更らに同様の繰言をのべねばならなかつた、不況時代になつたゝめに國家主義的傾向が各方面に現はれ、保護政策を助長するに至つたと同時に國際貿易の回復は妨げられる、和蘭は相殺關稅を適用して、自國と何等通商條約を締結して居ない國に對し無制限に輸入税を増加しように至つたけ

れども、この政策は不況の克復には有効でない、一九三三年全世界の繋船率は一割七分であつたが、オランダは約二割一分に達した、さうして運賃は未だ十分に運航賃を償ふことができてゐない、たゞライン川が長期に亘つて低水であつたため船の積載量を減少した結果、多數の就役船を要するといふ現象はあつたが、それは偶然の出来事であつて經濟狀況の調制にはなつてゐない。

蘭領印度では日本の地位が急速に向上したのに驚いて對策に腐心してゐる、日本人は蘭領東印度で貿易、海運共に儲けて居るが、之に對して今日の所最良唯一の方法は割當制の實施があるのみである、と申論乙駁やかましい時代になつた、そこで蘭領印度の貿易を通觀すると、其著しく發展したのは歐洲大戰後で、一九二〇年度には、一九一三年度の三・二倍になつたが、一九二九年度から減退した、これは世界不況のためである、故に一九二七年の好景氣には十六億四千百萬盾に達した輸出額は、一九三二年に五億四千百萬盾に萎縮した。

次に輸入をみるとその減退は遅くれ一九二九年に十億八千七百萬盾にも上つた輸入總額が一九三二年には三億六千八百萬盾に激減した、これ全く特産物の價格が下落した、ために一般の購買力が減少した結果である、處がこの國への主要供給國はと見ると、日本、和蘭、シンガポール、英、獨、米、伊で日本は戦前に僅か一・六%であつたが、戦後激増して一九三〇年度には和蘭につき第二位となり一・六%をしめ、一九三

一年は和蘭を凌ぎ第一位となり一九三二年には二・三%に上つた、和蘭は戦前三三・三%を占め一九三〇年迄首位に居たが一九三一年には政府勘定を除く私人勘定に於て日本の九千二百五十五萬盾に對し八千三百八十三萬盾にしか達せず、一九三二年には日本の二一・三%に對して一五・八%となり、シンガポールは第三位で二・五%になつた、英國はこれについて九・六%、獨逸は七%、米國は六・七%となつた、ついで英領印度四・七%、大洋洲三・三%、暹羅二・二%、香港二・一%といふ順序である。

重要輸入品は綿織物を第一、米及其他食料品之につき織品、機械器具、鐵及鋼製品、紙及紙製品、烟草肥料等を輸入しこの九種で總輸入の六割をしめる。

綿製品は本邦綿布の海外に於ける一大市場であつて、一九三二年には輸入總數量の二分一に達した、就中未晒綿布は五、八八八〇〇疋に達し、晒綿布無地染、染糸綿布、モスリン、綿サロン等これにつき、未晒は殆ど獨占である、晒綿布は和蘭が首位であるけれども本邦品の方が勢がよい、其他のものは有力な競争者がない、其他各種の織物も多量に上るが一九二九年以來日本の人絹の進出著しく一九三二年には輸入の九割に達した。

米も英領印度からの輸入が第一であつたが、日本は一九二九年迄皆無であつたのに、一九三一年には一躍八・九%に上つて、當局を驚かした、鐵及鋼製品では一九三二年に日本第

一、獨逸第二となつた、たゞ機械類では日本は二・四%にすぎず獨逸、和蘭、米國の方が日本よりも有力である。いづれにしても日本からの輸入は歴倒的である。

専ら蘭領印度の物産をみると砂糖、ゴム、コーヒ、茶等農産物及鑛産物で砂糖はキューバと共に世界二大供給地であり、ゴムは馬來について第二位、茶はセイロン及印度について第三位、コブラと胡椒は世界一、烟草は第二位、其他椰子油、タピオカ、カボツク、規那、カカオ等何れも主要輸出國である。其主要品の世界的位置は左の如し。

	世界生産	蘭印生産	比率	順位
砂 糖	二、七六八、〇〇〇 噸	一、五七〇、八七〇	二二・四%	二
ゴ ム	一、〇四〇、〇〇〇	二九六、二五五	二八・四%	二
珈 琲	一、七〇〇、〇〇〇	六六、六八一	四・〇%	三
茶	四、五九、〇〇〇	七六、七四三	一・七%	三
コ プ ラ	一、二五、七〇〇	三、〇、七七一	三・七%	二
胡 椒	五、六〇〇	三、八〇八	四五・七%	一
柳 子 油	三三、八〇〇	六、三三三	一九・九%	一
タ バ コ	二、二〇〇、〇〇〇	八五、〇〇〇	三・五%	二
錫 鑛 石	一、四、三三三	二七、六三三	一八・七%	三
錫 スメ ル タ ー	一、五、四〇八	三、六六八	八・五%	二
原 油	一、九、六六、五五五	四、五〇、六四四	二四・〇%	七

雜 報

位をしめるが、一般的にこれらの産物は一九三二年度に於て一九二八年よりも減退してゐる、不況の主因がこゝに存する、この中石油は一八八七年に初めて英米等の外資で發達し、現在を米國、ロシア、ヴェネズエラ、ルーマニヤ、波斯及メキシコについて世界第七位で、波斯と共に東洋の二大供給源である、その主要仕向國としては日本は第二位で七%であるが海峽殖民地は三三・三%で第一位である、砂糖も日本は第五位であり、ゴムも茶も日本は少量を引きうけるに止まる。自から片貿易といふことになるので今回の會商といふことになつた、會商の初めに於て長岡代表の聲明は土人を刺激したので、オランダ本國もやゝ弱はつてゐるといふが果してどうなるであらうか。

○白耳義と日本

一九三三年の對本邦貿易は輸出入共に前年に比して著増し白國への輸入は四千六百七十三萬四千法にして約三割増加、日本への輸出は二億七千七百六十四萬九千法で十割の増加となつた、日本からの輸出の主要品はゴム靴、蟹、魚類罐詰、屑綿、陶磁器、ベニヤ板、絹織物、婦人衣裳、キヌメリヤス、化學製品等といづれも七、八割の増加であるが、日本はこれに對して驚くべき多額の輸入をした、主として鐵製品で二億三千萬法に上り、十五割からも増したので、白耳義としては時節感謝すべき關係に立つのである。

ところが右の如く約六分一にすぎない日本品の輸入に關し、一九三二年以來漸次増加したので、(ゴム靴と絹製品が十

割も増した。白國各新聞紙は競ふて日本品のダンピングに關する記事をかゝげ、遂には日本製時計は目方でうるとか、自轉車一臺が二百法、甚だしきは五十法など、全く誇張的な浮説さへ書き出した、世上一般は恰も白國市場が本邦品のみで壓倒されてゐるやうな印象を與へた、一方製造業者も切りに本邦品に依る壓迫を訴へ、その結果ゴム靴に數量的割當制度を實施し、ついで絹織物、絹メリヤス、衣裳類をも制限した、しかしこれは白國自身で考ふればこうした片手落はない筈であつた。其後本邦品の輸入額の統計を數字に付てみると一九三三年度の輸入は前年度に比し精々三割の増加を示せるに止まり數量は却て減少してゐる、勿論ゴム靴、絹製品のごとき輸入激増で白國の製造業者を驚かしたものがあつても、是等二、三の事實で、本邦品が白國の産業全般を脅すわけでもない。しかも一方白耳義の本邦への輸出額は輸入の六倍にもなつて、白耳義にとり極めて有利な關係であるから、近頃になつてこの事情が白國の人にも明になり有力の新聞や雜誌も、本邦品の輸入増加は白國の不利でない、それよりも日本は白國の第一の顧客であるとかくものが増加してきた、つまり貿易は相身互の戦法でゆく外に發展はないものなのである。

○歐洲鐵工業の近況

蘇聯邦は一九三二年度の不成績に鑑み一九三三年度は五ヶ年計畫の理想たる粗鋼年生産九百五十萬噸を實現せんと努力したが事實は辛うじてその三分二を充たすにすぎず年産銑鐵九百萬噸も實現せずして僅に七百

二十萬噸に達した位である、而も第十八回共產黨大會での報告には、同國が最近三年間に商工業に投下した資本は二百十五億留の多に達したのである、なぜかやうに不成績であつたかの原因は、第一に生産組織の不統制、各社探掘設備の不良操業を妨ぐる機械破損の頻發等に加ふるに製鋼製鐵工場へ原料の供給不十分で屢々熔鑛爐の作業を中断した事實に基く、同大會での報告によると工場の所定労働時間の履行は甚だ困難で操業時間五乃至四時間を出でざりし事屢々であつた、又企業の經濟的計算も漸次閉却せられドネツツ低地の工場のみで一九三三年最初の五ヶ月間に石炭五萬噸、煤炭二十萬噸、鐵鑛十九萬四千噸を通常の生産能率發揮以上に浪費した事實もあつた、スターリン製鋼場の成績も之に類似してゐるし、チユルチユ製鋼所は更に不成績であつた、即ち生産は増加しないで生産費は不變なりしのみか寧ろ其比率は膨脹したといふ始末である。

最近モトロフが發表した一九三三年度の計畫も鐵の増産を重要視せるもので、同年は銑鐵粗鋼共に約四〇%の増加を豫定し更に既存設備を考慮することなく、十二ヶの熔鑛爐四十ヶのシューメンスマルチン爐二十五ヶの壓延軌道及び三個の鋼塊壓延工場を新設する計畫をたて將來四年間に一九三二年の生産高に三倍せしめんとしてゐる、この點ソ聯邦は如何なる犠牲を拂うとも完全に鐵自給の域に達せんとしてゐるのである。

佛國、自國ルクセンブルクの鐵工業及歐洲鐵工業國間協調の近況をみると一九二六年に設立された國際鋼カルテルが充分其目的を達成し得ざりしを以て一九三二年中期に至り事實上解散の形となりたる以後、一九三三年六月に獨・佛・白及びブルクセンブルク諸國の鐵工業者は往來のカルテルに代るべき國際粗鋼輸出カルテルを組織した、この新なるカルテルは生産量の限定は之をすて、輸出量の割當といふことにしたのであるが同時に一九三三年六月半製材、梁材、棒鐵厚板、中板、ユニバーサル鐵帶鐵に關し各々其國際販賣組合を設立せられ新しいカルテルの實効をあくることになつた、勿論このカルテル參加の各國は利害關係必しも一致しない、むしろ相背馳してゐるけれども、全く混亂せる市價を調整するためには互にかうした輸出統制をすることが絶対に必要であるのであつた、幸にしてこのカルテルは其効力が漸次明になり四國間の販賣抗争は中止し一九三三年初期に暴落した市價が中期以後堅實に回復するに至つた。

ベルギーの粗鋼生産者の如きは結束して一つの組合をつつたため帶鐵其他二三の組合と共に同國の製鐵業者は組織的統制を完成した、佛國もこの傾向に見てカルテルが出来上つた、又獨逸は波蘭の鐵工業側に對し獨逸國內市場の壓延物全販賣量の〇・〇七%に相當するコンチネントを與へた、獨逸間の造船材料販賣に關する了解も一九三四年六月三十日迄繼續することになつた、かやうにして歐洲大陸の鐵工業國は互

に安定の位置を得ることにつとめてゐるが、英國の鐵工も、政府の輸入關稅政策、爲替政策に庇護されて一九三三年度英國の鐵及鋼の輸入は前年に比し約四〇%減少し九十九萬噸となり輸出はやゝ増加して二百萬噸になつた。

○北滿輸入の海産物

ハルビンへの輸入海産物は鮮魚介類、鹽魚、鱈魚及乾魚介、海藻と罐詰の各種類がある、これらの内海産物としては鮪、鯛、鯖、鯛、烏賊、鰯、比良目、蝦、黃花魚、牡蠣を主とし、大連、安東、營口を経て輸入される、この中、黃花魚は滿洲國人、鯛、比良目、鰻、蟹等は日滿共通の需用其他は日本人向でロシヤ人の海産鮮魚の需要は極めて少く鰻と蟹は食ふが量は僅少である、鹽魚では黃花魚、鮭、鱒、鰻、大刀魚、鰯が主で、大刀魚は滿洲人の好物であり、其他は露滿共通である、鮭と鰻及鯛の鹽物はロシヤ人の食卓に欠くべからざる食料であるが、邦人向は少い。

大刀魚、鮭、鱒、黃花魚で主として滿洲人方面に向くものゝ大部分は黃海産の美味なものであり鰻、鰻、鮭等ロシヤ人向のものは露領沿海州、勘察加、米國、加奈陀産のものが多く、嗜好の關係から日本品の斯種のものとは不向である、つまり魚類も土地柄であり交通關係が第一の需要顧客を決定するといへる。

鱈魚は鮭と鰻が主で沿海州から輸入されロシヤ人が大部分を消費し、日滿側には僅少の需要しかない、海藻では昆布第一位で最大量が滿洲人に消費され僅少な高級品が日本人向で

ある、北鮮近海と北海道の産が多く、滿洲人向の粗悪品は沿海州産である、寒天は滿洲人の疲弊でその需要は減少した。

乾物では海參と鮑、貝柱、鰹、鱈等を中心としこの内支那料理に不可欠のものとして海參の需要第一である、沿海州や北鮮近海物を主とし、鮑と貝柱は大部分日本産であるが、上海市場を經由してくるものが多い、これも商業地理上の一現象であらう、鰹は大部分黄海産で營口、大連及芝罘方面から入る

鱈は日本からの輸出で、香港、上海經由となつてゐる、鰹には鱈、蟹、鮑が最も多く日本製の味附で、鮭、鰹、赤貝、帆立貝、烏賊が輸入される、この中鰹即サーデインはロシア人、蟹は日滿露に共通、鮑は滿洲國人へむけられ、日本製の鮭、鰹、赤貝、帆立貝、烏賊等は醬油の味が合致しないので、露滿人方面への需要は殆どない、朝鮮物は幾分日本品よりもわろいが價格が低廉で、最近ロシア品に對抗して其地盤を侵してゐる、この外筋子、カビア等の需要がロシア人方面に相當にある。

以上海産物は北滿へ年額五、六百萬圓に達し滿鐵經由、ウズリ線又は京圖線の三方面から入る、京圖線は開通日尙淺いから目下僅少であるが將來は日本海産の全部を吸收するであらう、ロシアの鹽鮭類は日本品の如く腹に鹽をつまこまぜ鹽水中に漬け樽詰としてゐるので、味が軟い、又鰹のサーデインも、日本品はアメリカや蘇聯物に及ばない、魚の罐詰も滿露人共に日本式味附を好まない、鮭、蟹のやうに單にポイル

した程度のものが一般に嗜好される、昆布は高級品は不可、一般滿洲人が冬期中野菜の代用として且鹽分の補給にする關係上、價格の低廉で鹽分の豊富なることを第一要件とする。

○世界棉花生産狀況

最近ニューヨークの報告によると、一九三三—三四年間世界棉花收穫高は二四、九一三、〇〇〇俵に上り、前年よりも幾分増收であるが、依然として收穫は縮小してゐる、これは主として世界收穫の六割をしむる米棉の減少によるもので、米國以外の收穫は却つて増加した。

最近五年間の米棉と其他の外國棉收穫高左の如し。(單位千俵)

米國	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年
諸外國	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年
世界	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年

諸外國中、主要棉産國の三年間の見積(單位同)

埃及	一九三三—三四年	一九三三—三五年	一九三三—三七年
印度	一九三三—三四年	一九三三—三五年	一九三三—三七年
支那	一九三三—三四年	一九三三—三五年	一九三三—三七年
ブラジル	一九三三—三四年	一九三三—三五年	一九三三—三七年
ロシア	一九三三—三四年	一九三三—三五年	一九三三—三七年
其他	一九三三—三四年	一九三三—三五年	一九三三—三七年

○重慶の商業現狀

支那の重慶は雲南貴州に達する門戶

で西南商業の中心地である、民國改元以來商場を七大區に分ち、市内陝西街、曹家臺一帶は、錢莊字號(大商店)の所在地となし、打銅街道門口一帶は疋頭、棉紗業取扱商舖地となし新街口及接聖街は糖莊鹽號の所在地となし三牌坊儲寄門一帶は山貨藥材業の所在地と爲し、大、小樑子一帶は蘇廣洋貨の所在地と爲し、都郵街三教堂一帶は京貨綢緞の所在地と爲し白象街商業場一帶は航業輪船の所在地と爲す、ついで四川局部的戰爭年と共に連り苛酷なる稅捐續發、大小商店は資本缺乏し、倒産するもの十中八九に達し嘗て最大の商場を誇つた土地も今は一變して人をして今昔の感に堪えざらしむる。

錢莊 重慶の錢莊は前清時代の票號を改組すること二回、全商場の金融の中心機關である極盛時代には六、七十戸の多を數へ湯、黃、揚の三大資本家によつて開かれてゐたが、現在十數戸に激減した。

鹽商 鹽は四川の特産で從來楚計の兩岸に分れ楚鹽は主として湖北西部に、計鹽は四川省内に販賣されてゐたが淮鹽、苧鹽の侵入以來、四川楚岸の鹽は全く喪失、鹽商すべて地を拂ひ、只今は計鹽四五戸にすぎない。

絲商 四川の生絲は遠く歐米に達し、戦前には重慶に絲廠林立し勞働工人も數十萬人に達したが、各國の人絹におされたのと、國內の需用も減退し多くの工場はすべて廢業、目下大華公司あるも製品不良、税金過重で全く不振である。

綿紗 綿絲の販路は四川全省に誇り、年々數萬元に達した

故に綿絲商も大小三十餘戸に達したが、近年農村疲弊のために販路日々に減退し、多くは倒産し綢緞業と兼業のもの數戸となるに至つた。

疋頭 吳服反物商は多く日本品を取扱ひ民國十二年頃市内打銅街門口道には商家林立し天字郷のごとき營業最盛大であつたが、今は殆ど失業である。

綢緞業 本市の絹物吳服商は數年前まで八、九十戸もあつた、多くは舶來品を販賣してゐたが、近年税金と舟運費が加重した、めに多額の資本を要し目下三分一に激減してゐる。

山貨 山貨とは牛羊皮又は五樁子等の取扱ひである、これらは輸出の大宗であるが、昔は各國に輸出されたが、其後一向に改良しないので、西洋人の顧みる所とならず輸出稅加重で十中八、九損失を招き今は營業一落千丈の狀態になつた。

藥材商 四川省は藥材が昔から多く輸出の大宗であつたが輸入の洋藥に抗爭が出来きず毎月缺損つゞきで困つてゐる。

糖商 四川の糖業は元來他より供給を仰ぐ必要がない程大きいのであるが、品質粗悪で機械製糖の輸入と大刀打が出来なくなつてしまつた。

航業も又外商に侵奪され、歐米の奢侈品をうる雜貨商もうるものも共に秋風落葉である。

これを要するに重慶市の商況は目下萎縮の一途に立ち今にして挽回策を講ぜざれば破産狀態に陥するに至るが其重なる原因は全く稅捐の過重である、原價一千元の品物に各地の稅

金が加はると百二十元に達するといふので商人は全く困却しきつてゐるのである。

○享保以後の地理關係出版書目 大阪 (十一)

書名	譯者	板元	出願
----	----	----	----

訓地學問答 中本 三冊	卜部精一(小田縣貫族)	梅原龜七	明治六年六月六日
-------------	-------------	------	----------

【附記】 此の出願に對し題名を改むべしとの指令ありしを以て同年七月二十六日「地理初學」改題の旨届け出でたり又本書板行出願の文中には「右の書は一千八百五十八年亞國コルネル氏の原書を幼童に解し易きよう問答文に記載仕候書にて」と書添へあり

開大日本往來 三冊	島 有三	森本太助	明治六年六月六日
-----------	------	------	----------

【附記】 本書板行出願の文中には「右之書は内國府縣郡名産物風土の概略を記載仕候書にて」と書添へあり

世界風俗往來 一冊 再板發行願出	中金正衛	大野木市兵衛	明治六年六月二十六日
---------------------	------	--------	------------

測地新法 中本 二冊	岡本則録(文部省十等出仕 大坂開明學校在勤)	梅原龜七	明治六年六月二十六日
------------	---------------------------	------	------------

【附記】 本書板行出願文中には「右之書は一千八百七十一年米國ジルレスピー氏著述ランドソルウイイングといふ原書より翻譯仕候陸地窮理書にて」と書添へあり

内國往來 半紙本 一冊	坂本秀岱	石田和助	明治六年七月六日
-------------	------	------	----------

童訓三府往來 半紙本 一冊	山本與助	大野木市兵衛	明治六年十月
---------------	------	--------	--------

【附記】 本書板行出願の文中には「右之書は三府方今の形勢且横濱神港首書に名所舊跡各方里程等を記載仕候書にて」と書添へあり